



くすり博物館だより

〒483 岐阜県羽島郡川島町・内藤記念くすり博物館・Phone:058689-2101

第20号

鎮痛液
明治時代
61×43



特別展

江戸と明治の 看板とくすり

1989.4.4～6.30

くすりは、人々の健康な生活を守るために、なくてはならないものです。中でも売薬は人々が薬店で簡便に買えることや、配置薬として常備できることから、人々にとって大変頼りになり、必要なものでした。

今回の特別展では、江戸・明治時代の売薬の看板を中心に、関連のある資料—人々に配布されたちらし、色あざやかな紙看板、発想がおもしろい名前の薬や、デザインの凝った薬袋など—もあわせて展示いたします。

看板が屋根の上に、また軒先に何枚もさげられ、色美しい紙看板が貼られた薬屋の店先の賑いと、人々の薬屋さんへの厚い信頼を感じとっていただけることでしょう。



熊胆木香丸
江戸時代
85×42



梅の雪
明治時代
74×34

▼一二三 明治時代 52×183



神効散
明治・大正
84×84



清快丸
明治時代
108×110

一方膏
明治時代41×59



▲解凝丸
明治時代36×36

〈サイズの単位はcm〉

▶洋名売薬の先駆け ウルユス

大阪の松尾健寿堂より、文化9年(1812)に発売された、洋名の売薬の最初のもので。看板には蘭方・長崎の文字に加え・オランダ語風の横文字も書かれ、当時としては斬新なものでした。その後、次々と看板に横文字を用いたものが現れ、



幕府は、天保11年(1840)、嘉永6年(1853)に、看板の横文字使用の禁止令を出しています。

◀ウルユス
右 江戸時代
121×41
左 明治時代
137×47

▶官許第一号となった 宝丹

明治3年(1870)、政府は、「売薬取締規則」を公布、それまで自由に製造・販売されていた売薬の定価や、薬効などの審査がされました。

これによって許可された売薬の第一号が宝丹です。宝丹は、文久2年(1862)上野・池之端の守田治兵衛によって発売され、薬効は暑気あたり、中毒、かぜなどの万能薬でした。



▲宝丹 明治時代
44×91

◀九代目の守田治兵衛は能書家としても知られ、宝丹流といわれた独特の書体で、自分の店の製品のみならず、他の売薬の看板などにも腕をふるっています。

▶美濃表佐の血の道薬 蘇人湯

蘇人湯の製造元飯沼家は、美濃表佐(現在の不破郡垂井町表佐町)の旧家。谷崎潤一郎の小説「細雪」の爛柯亭での螢狩りの場面は、飯沼家の爛灯亭がモデルとなっているとのことです。看板の字はとても蘇人湯とは読めませんがそれがねらいかもしれません。



▲蘇人湯 明治時代
111×73

▶人々に親しまれた トレードマーク

おなじみのトレードマークも時代の移りかわりによって、変化がみられます。



◀ 新収蔵資料 ▶

● 江馬蘭斎の蒸気風呂

大垣出身の蘭方医、江馬蘭斎が考案、180年近くも受け継がれ、使われてきた「蒸気風呂」を江馬庄次郎、内藤よね様よりいただきました。

江馬蘭斎（1747～1838）は、杉田玄白、前野良沢らに蘭学を学んだ江戸時代の医師。オランダの医学書からヒントを得、蒸し風呂を梅毒の治療に用いることを考案、使用しました。

構造は、二個の酒だるのふたを抜き、互いに逆に合わせ、下方にとり付けた扉より出入りするもの。たるの下で釜で湯を沸し、蒸気をたる内にこもらせ、蒸気浴ができる仕組み。蘭斎は氏家庄兵衛に蒸し風呂治療の経営を任せ、最近まで庄兵衛の孫にあたる内藤さんが自宅で経営、蒸し

風呂は蘭斎の時代より数えて三代目のもの。釜の湯の中に川芎（センキュウ）などの薬草を入れ、リュウマチ、神経痛、皮膚病などの治療に使われていましたが、このたび180年の歴史にピリオドが打たれ、当博物館で貴重な資料として保存されることになりました。

蒸し風呂と、江馬さん、内藤さん



● 湯浅四郎氏コレクション

古美術研究・収集家であり、種々廻舎研究所会長の湯浅四郎先生より、錦絵、紙看板、薬業資料など約300点をご寄贈いただきました。先生からは、これまでも多数の資料をご寄贈いただいております。今夏には湯浅コレクションを中心とした特別展の開催を企画中です。



くすり事始(6)

4月からの消費税の導入は、各方面で論議を巻き起していますが、明治16年売薬に10%の税が課せられることになり、大変な騒ぎとなりました。消費税の3%は購入客の負担ですが、売薬に課せられた「売薬印紙税」は定価の10%で、製薬業者の負担でした。製薬業者は予め売薬印紙を購入、製造した売薬1品ずつに定価の10%相当の印紙を貼り、消印をし、出荷する仕組みです。利益に対する税ではなく、定価の10%の税ですから、手間もさることながら大損失となりました。

このような税をかけた理由は、税則によると、売薬の利益は極めて大きく、酒やタバコと同様、日常生活

の必需品でないことを理由にあげています。

明治政府は、無効な売薬が多いため、これを禁止する方針で、急に禁止したのでは医に恵まれない山間へき地の人々は困るとして、高税をかけ、漸減の政策をとったのです。

今も昔も大さわぎ

売薬印紙税

この税の施行で最も打撃を受けたのは、各地の配置薬業者でした。各家庭から使用しない売薬は回収されますが、すでに印紙は貼ってあるので入金できない上、税は取られ済みです。売薬印紙税施行前年の富山の配置薬業者は9700人、生産額672万円でしたが、施行された明治16年は60,00人、85万円と大激減しました。配置業者は猛運動を展開し、明治19年には回収してきた売薬の印紙は交換

できることになりました。

売薬印紙税は特に零細企業に影響が大きく、廃業するものも続出した一方、企業の合併が盛んとなり、営業組織の強化などの対策も講じられました。さらに薬学の進歩も相まって、売薬の処方改良も盛んとなり、

より有効な売薬の誕生へと継がれていきました。

この税は、新薬・新製剤には適用されませんでしたので、売薬か新薬かという論争もありました。

このように多くの問題をまき起した売薬印紙税は、大正15年に廃止されました。

売薬印紙▶



薬草豆知識

おなじみのスパイス

コショウ

日本のほとんどの家庭で常備するほどに普及したスパイス（香辛料）の一つにコショウ（胡椒）がある。コショウはインド南部を原産地とする多年生のつる植物で、成長すると10cmほどの尾状花穂に小さな白い花が咲き、花後に緑色の果実がジュズ状に着く。小さな果実は熟期が近づくと黄変し、熟すると赤くなる。赤く熟す前の果実を採り、そのまま乾燥したものが黒コショウで、採った果実を袋を詰めて水につけておき、軟化した果皮を除いて水洗乾燥すると白コショウができる。

コショウのピリッとする辛味成分は

果皮に多く含まれているので、当然のことながら黒コショウのほうが辛味は強い。

黒コショウは野菜炒めをはじめ、どんな肉料理にも用いられるが、白コショウは色の白い料理、たとえば、ホワイトソース、シチュー、クリーム煮、白身魚料理に用いられる。ちなみに中国やヨーロッパではマイルドな香味の白コショウが好まれ、アメリカでは黒コショウが多く使われている。

このように全世界の人たちの食生活に使用されるようになったコショウであるが、15世紀後半から始まる大航海時代以前のヨーロッパの人たちにとっては金銀と等量に取り引きされるほどに高価で貴重なものであった。

インド人、アラビア人、トルコ人などの回教徒交易商人たちにより、イラン、イラク、アラビアの山岳、砂漠を越え、同時に盗賊や砂嵐の危険を冒して地中海沿岸の都市国家に運ばれるのだから、その価格は数10倍、数100倍となり、ヨーロッパに到達した時には金と等量で取引されたという。



薬用植物園
白井 英夫

とびっくす

▶第4回 植物画講座 参加者募集

昨年春より開催の植物画講座も今回で4回目。前回は年賀状の図案を作成しましたが、なかなか好評でした。今回は、薬用植物園内で点描画の基本となるデッサンと、色づけの方法を中心にとりあげます。ぜひ、お気軽にご参加下さい。

○日時 4月23日（日）

午前9時30分より

午後2時30分まで

○対象 中学生以上一般

○定員 15名（先着順）

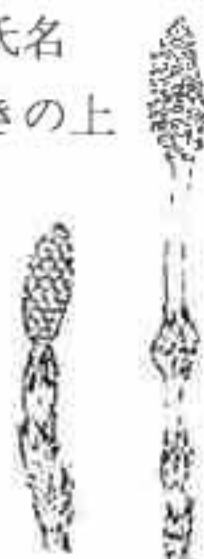
○参加費 700円（実費）

※往復ハガキに住所、氏名
電話番号・人数をお書きの上
お申し込み下さい。

追って詳細はお知らせいたします。

○締切り

4月18日



▶「ポスターにみる大衆薬'88」展 開催

昨年10月4日～12月4日の期間、日本大衆薬工業協会にご協賛をいただき、薬局・薬店でより多くの人々により薬を知ってもらうために使われているポスターなどのPR品約240点、また、明治から昭和初期の薬の広告も併せて展示。約1万人の方々に観ていただきました。人気タレントのポスターや、おなじみの店頭マスケットなどカラフルな特別展は、薬業関係者・ご家族づれの方に特に好評でした。

▶ジャワ島よりビャクダンの苗入手

昨年5月、日本の植物園では珍しい、ビャクダンなど多数の熱帯薬用植物を入手。現在も順調に生育中です。ビャクダン（白檀・ビャクダン科）は、インド原産で芳香があり、家具やじゅうずにも加工されます。

“梅檀（せんだん）は双葉より香ばし”の梅檀はこのビャクダンの異称です。

— 資料寄贈者ご芳名 —

貴重な資料をご寄贈いただき、
ありがとうございました。

阿部要介	安福彦七	石田純郎
石原 侑	岩瀬忠男	大垣内宏
影山静夫	片桐平智	鹿野美弘
木村雄四郎	熊谷正朋	俵広貫堂
小林繁樹	近藤晴夫	斎藤文雄
酒井シヅ	酒井薬局	坂元一郎
阪本秀策	佐久間温巳	佐藤清夫
篠田達明	鈴木 研	宗田 一
瀧川義一	田邊 普	戸田恒光
鳥羽義門	虎谷豊二	鳥越謙一
内藤幸次	長門谷洋治	並木 勉
丹羽源之助	服部敏良	林 春雄
久一武文	久金 彰	藤井清久
町本昭成	松浦薬業(株)	松岡徹正
松見勝海	水谷秀次郎	安江政一
山下愛子	湯浅四郎	吉井千代田
吉川敏男		
陳 玉麟	N・A Nicolov	

（敬称略）